

A2. 壁土は、その役割から荒壁土と中塗り土に分けられます。荒壁土は下塗りとして工程の最初に塗られる土で土壁の中心部を構成する役割があります。どちらも「荒木田土」(壁土用粘土)をベースとしますが、荒壁土では、ある程度厚く塗るため粒度の大きいものを使います。これに「荒苧」といって藁をぶつ切りにしたもの(ストロー状のため水分を多く吸収)を混ぜ長期間寝かせます。これによる発酵で土に粘性が増し、この粘性により壁下地である竹小舞などの下地材にしっかり付着することが重視されます。しかしながら、粘性を高めるため「荒苧」を使い、水分を多く含ませる必要から壁の乾燥時に起こる収縮により、大きなひび割れや不陸が無数に生じ、見た目としては、まさに「荒壁」となります。また、この荒壁の段階では、「縄入れ」といって塗土に縄を伏せ込むことで建物と壁を一体化させることが重視されます。

一方、中塗り土は、上塗り(仕上げ塗り)の下地としての役割があり、収縮が少なく、平滑に仕上げることが主目的としています。そのため「荒木田土」を目の細かい篩にかけ、粒度を小さくし、多量の砂と非常に細かくした藁(揉み苧)を混ぜることで水分量を減らし、乾燥による収縮亀裂を防ぐ工夫が図られます。これにより結果として、荒壁に比べ、空隙が少なくなるとともに密度が高まることで地震力に対し、変形しながら(崩壊しながら)抵抗しエネルギーを吸収するための耐力(圧縮強度)の向上が図られることとなります。

つまり、壁の下地材である小舞に中塗り土を塗っても付着することはなく、役割に応じた段階的な塗りを重ねる必要があるといえます。このことは、中塗り土にとっての下地材ともいえる荒壁土の存在があってこそ中塗り土の効力を発揮できるものと考えられます。



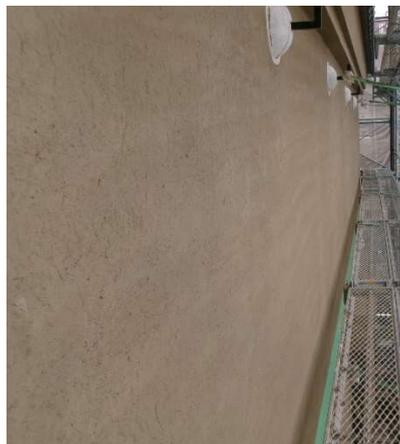
竹小舞下地と荒壁



荒壁土に縄を伏せ込む



乾燥収縮が進む荒壁



中塗り壁